

2019年7/4(木)~5(金)

第8回日本精神科医学会学術大会 北海道札幌市

慢性腰痛・鎮痛薬乱用に認知行動的アプローチが有用であった認知症高齢者の一例

大阪 聖志会 渡辺病院

小山知子 杉野美穂

【はじめに】在宅生活中に腰痛を訴え鎮痛薬を乱用し入院に至った認知症高齢者に対し、疼痛・乱用の心理的背景にある不安の解消や要求を充足させる認知行動的アプローチを行なった。その結果、腰痛の訴えと鎮痛薬の要求が軽減した症例について報告する。

【症例】A氏 80歳代、女性、アルツハイマー型認知症 (F00.1)。鎮痛薬による行動障害、有害な使用 (F13.1)

【主訴】腰が痛い。薬が欲しい

【家族歴】特記すべきことなし

【既往歴】変形性腰椎症

【生育・生活歴】小学校卒業後、工場勤務。結婚を機に退職、2児をもうけ、夫と2人暮らし

【現病歴】X年6月、自宅で転倒し整形外科を受診、腰痛に対し鎮痛剤が処方されると一度に多量に服薬するようになった。X年8月鎮痛薬の多量摂取による十二指腸潰瘍で入院し手術を受けた。自宅へ戻った後も腰痛と鎮痛薬の要求が続き、暴れることもあり、認知症専門病院に入院した。

【初診時所見、診断とその根拠、治療方針】表情も陰しく、口調も荒く、腰痛と鎮痛薬を要求する。長谷川式簡易知能評価スケール7点、腰痛に対して薬物療法を継続するも、乱用に対して心理的アプローチを行なうこととした。

【治療経過】キシロカイン筋肉内注射、アセトアミノフェン座薬を投与するも、1日に60回以上の鎮痛薬の要求があった。偽薬を用いたり、過剰の鎮痛薬の危険性を説明しても変化はなかった。そのため、鎮痛薬の要求や、疼痛の訴えに先んじて、痛みに関心する言葉を頻回にかけ、身体に優しく触れながら話すようにした。また鎮痛薬の効果や、次の薬の時間を説明し、不安を軽減するような、認知行動的アプローチを行なった。その結果、腰痛の訴えと鎮痛薬の要求をす回数が減少し、表情も穏やかになった。

【考察】認知症高齢者においても、慢性疼痛・鎮痛薬乱用に対して、心理的背景にある不安に重点を置いた認知行動的アプローチが有用であることを学んだ一症例であった。

